

令和三年五月、熊本県天草を舞台にした映画『のさりの島』が上映されました。

ストーリーは、オレオレ詐欺を繰り返す若い男が、天草の寂れた商店街に流れ着くところから始まります。そこで彼は、騙すつもりで老女に電話をかけますが、現金を持ってきた老女は彼を孫として受け入れます。こうして二人の奇妙な共同生活が始まり、やがて若い男はその暮らしに居心地の良さを感じるようになります。

映画の題名にもなっている「のさり」という言葉は、「のさる」「のさった」とも言われます。この言葉は、主に長崎県、熊本県、鹿児島県で使われる方言で、「天からの授かりもの」「運命」「幸運」などと訳されます。良いことが自分のもとに舞い込むと「のさった」、そうでないと「のさりじゃった」と使われることがあります。

ただし、「のさり」の方言を使用する地域の一部では、良いことも悪いこともすべてが「のさり」であると考えられています。すべてが天からの授かりものなので、良かったことが起きて「のさりじゃった」とは言わず、すべてを「のさり」として受け止める文化が根付いているのです。

冒頭で紹介した映画『のさりの島』の老女も、オレオレ詐欺を繰り返す若い男を、天からの授かりものとして受け入れたのかもしれません。

生活法則である純粹倫理を発見・唱導した丸山敏雄は、純情（すなお）な心を持ち



## 先人の知恵に学び、苦難は 天からの授かりものと捉えよう

続けることを重要視しました。具体的には「ふんわりとやわらかで、何のこだわりも不足もなく、澄みきった張りきった心」を指します。さらに、これまで世に現われた偉人たちは、その分野にスナオであったからこそ、大成したのだと力強く述べています。では、スナオになるためには、日常生活でどのような実践をすればよいのでしょうか。丸山敏雄は著書の中で以下のように記しています。

「スナオ」、これは万物万象をそのまま受け入れる心である。【中略】そのまま受け入れることが「スナオの陰極」（受身のスナオさの極点）である。万境に順応して、そのまま受け入れるところに、生成発展の根本がある。大きな発動は、大きな受容によってはじめて可能である。『歓喜の人生』

目の前に現われたことをすべてそのまま受け入れることは、並大抵の心境ではできないでしょう。特に嫌なことや苦手なもの、また苦難が目の前にやってきたときには、逃げ出したくなるものです。

しかし、そうした時こそ、苦難を真正面から受け止め、なぜこの苦難がやってきたのかその本質を見極め、一つひとつ正しく切り開いていくことが重要です。

先人が培ってきた様々な精神文化、さらには、冒頭でも紹介した「のさり」のように、目の前に現われたことを天からの授かりものとして受け入れていきたいものです。